

山田小学校だより (Metamorphose)



文責 校長 谷川 晴峰

「書く」という作業（行動）の未来形は？

私が学級担任をしていた頃、「学級通信」という言葉は存在していましたが、4月の冒頭に1枚出して、後は年度末の3月頃に「お世話になりました」と書く程度でした。4年間の担任時代には多分、通算でも10枚は書いていないと思います。今は、当時の罪滅ぼしとして学校便りを発行しているわけです。それにしても、年間で100号発行はきついものです。

平均すると、子供たちの登校日数は、年間で約200日程度です。自分の仕事の関係で、今年度の出勤日数は160日くらいとなります。その中で100号を発行するとすると、1.6日に1枚書かなくてはなりません。結構タイヘンデス。「書くべき話題が無い」現実には直面します。実は、この53号も同じです。書くべきことが見当たらないので、懺悔と愚痴を記しています。

人間の脳に最も近いと言われているチンパンジーなる生き物は、抜群の記憶力を保持しています。私たちは、太刀打ちできません。しかし、彼らは言語的な音は聞き分けられますし、記号的な文字も認識できますが、言葉を書くことはできません。「文字を書く」「文章を書く」といった行為は人間にしかできないのです。そう考えると、「自分は幸せだな」と思います。

私は、来年の3月で定年を迎えます。畢竟（ひっきょう：つまり）、それ以降は書けなくなるのです。学校で、または家で書き、印刷・発行していますが、いつも気になるのは、「読まれているのかな？」ということです。職員室のレターケース→子供たちのランドセル→保護者様の眼と伝播しているのか、それともゴミ箱直行か……。答は私には分かりません。

古代より人間は、「文字」を考案し、記録を残してきました。紙やペン等が存在しない時代には、洞窟の壁や地表を削ったり刻んだりして、生きた証を残そうとしました。当時の古代人が、私たちが暮らしている現代文明を目の当りにしたら、きっと驚くに違いありません。文字を書かずに、指でキーをタッチするだけで、紙に記された文字や文章ができあがる……。

ところが、この方式さえも時代遅れのシステムになるかもしれません。今やスマホユーザーは、指での入力ではなく、音声入力に移行しつつあるそうです。「書く」という作業（行動）が、驚異的な速さで変貌しています。「読み・書き・計算」という基本的な学びの要素まで、形を変えていくのかもしれません。AIの加速度的な発達には、私たちの生活を大きく変貌させます。

今の子供たちが、来るべき新時代の主人公です。「様々な分野の職業が、AIに奪われる」との予想が声高に叫ばれています。「大きくなったら、どんな仕事がしたい？」という質問が、子供たちにとって、苦痛のタネになる日が来るかもしれません。あらゆる変化に対応できる力、新しい環境に適応できる力……。これまで以上に、総合的な人間力が必要になります。

残り僅かですが、子供たちのこと、先生方の奮闘ぶり、そしてそう明るくない未来の学校の姿等について、記していくつもりです。アト47号、お付き合いください。